近代文学研究叢書

第三十二巻

昭和44年7月10日　印刷
昭和44年7月15日　出版
昭和48年3月1日　二刷発行

〔¥2500〕

著者　昭和女子大学近代文学研究室

発行者　東京都世田谷区太子堂一丁目七番地　小林寅次

印刷者　東京都千代田区神田錦町三丁目十四番地　梶原忠幸

発行所　東京都世田谷区太子堂一丁目七番地　昭和女子大学近代文化研究所
振替口座　東京　一七〇八六七番
電話作表（422）五一三一番

近代文学研究叢書

第三十二巻

昭和女子大学
近代文学研究室

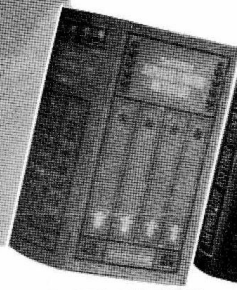
監

修

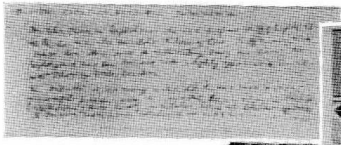
池田亀鑑（国文学）
石田吉貞（国文学）
石森延男（児童文学）
上井磯吉（英文学）
太田三郎（比較文学）
岡保生（近代文学）
荻原井泉水（俳文学）
片桐顕智（和歌文学）
金子健二（英文学）
河野実英（歴史学）
木俣修（和歌文学）
坂本由五郎（英文学）
佐々木八郎（国文学）
笹沢美明（独文学）
佐藤幹二（国文学）
伯梅友（文法学）
山宮允（英文学）
島田謹二（比較文学）
玉井幸助（国文学）
辻村鑑（英文学）
内藤濯（仏文学）
成瀬正勝（近代文学）
能勢朝次（国語学）
浜徳太郎（美学）
人見円吉（近代文学）
保坂弘司（国文学）
本間久雄（近代文学）
村松定孝（近代文学）
吉田澄夫（国語学）

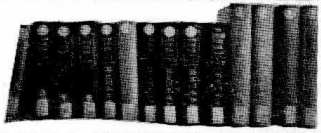
武信由太郎

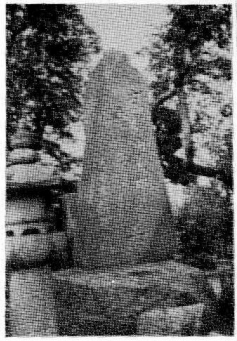
由太郎肖像

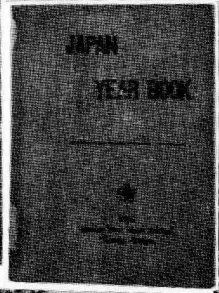


由太郎が主幹「発刊の辞」所載の「英語界」
―大正三年四月発行（昭和女子大学蔵）



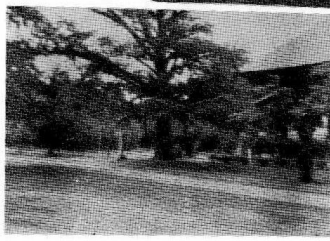






「英語世界」一巻一号―明治四十年四月発行
（昭和女子大学蔵）

二段左、由太郎の筆跡
三段左、「英文日本年鑑」―一九〇五～一九二九年
下段中、「〃」―一九〇五年版
明治三十八年九月刊（早稲田大学図書館蔵）

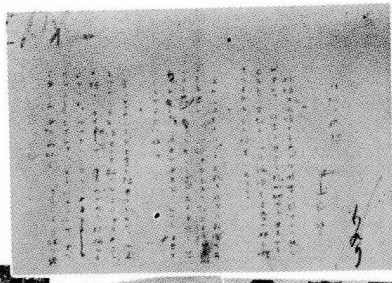


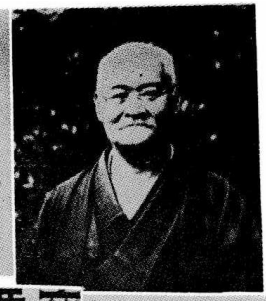
→由太郎の墓のある世田谷奥沢九品仏の境内
↑九品仏内にある由太郎と妻むめの墓

上段右，「武信ポケット和英辞典」―大正十三年五月刊
（研究社蔵）
上段中，「武信和英大辞典」
―大正七年十月刊（研究社蔵）
上段中，「英語青年」の前身
「青年」―明治三十一年四月
発行　（昭和女子大学蔵）

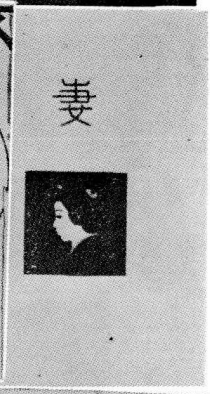
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

田山花袋





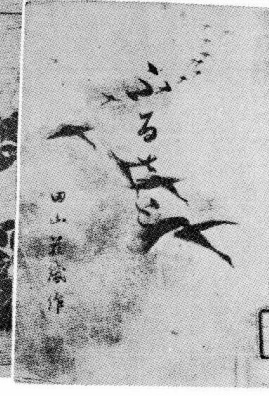
上段右、花袋肖像
上段左、「此頃の感想」の自筆原稿（昭和女子大学蔵）
中段右、「妻」（明治四十二年五月刊）
中段中、「田舎教師」（昭和女子大学蔵）
二年十月刊（昭和女子大学蔵）
花袋の主筆雑誌「文章世界」明治三十九年三月の創刊号（昭和女子大学蔵）



↑群馬県館林に現存する花袋生家中段左、尾曳稲荷神社境内にある歌碑

多摩霊園にある花袋の墓

「生」一明治四十一年十一月刊（昭和女子大学蔵）

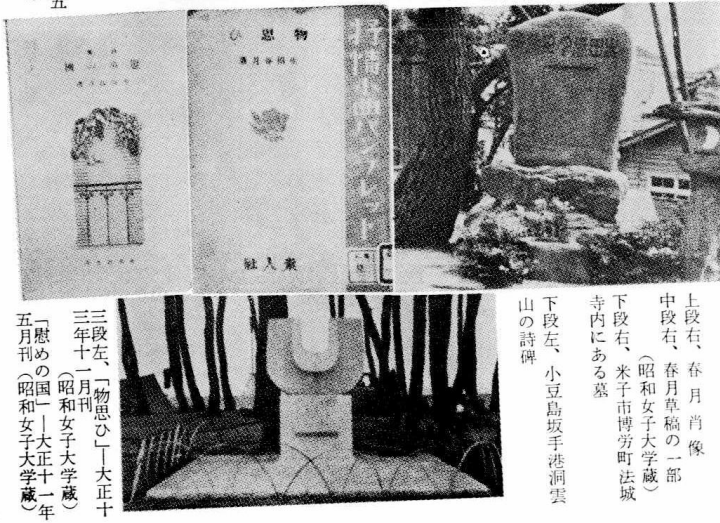


「ふるさと」一明治三十二年九月刊（昭和女子大学蔵）

生田春月

「春月小曲集」—大正八年十二月刊（昭和女子大学蔵）
「感傷の春」—大正七年十月刊（昭和女子大学蔵）
「澄める青空」—大正十一年九月刊
（昭和女子大学蔵）

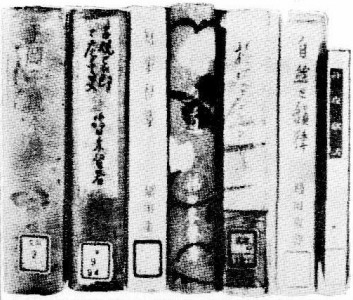
中段左、「象徴の烏賊」—昭和五年六月刊（昭和女子大学蔵）



三段左、「物思ひ」—大正十三年十一月刊（昭和女子大学蔵）
「慰めの国」—大正十一年五月刊（昭和女子大学蔵）

上段右、春月肖像
中段右、春月草稿の一部（昭和女子大学蔵）
下段右、米子市博労町法城寺内にある墓
下段左、小豆島坂手港洞雲山の詩碑

橋田東聲



上段右より
「静夜歌話」―大正十四年九月刊
「自然と韻律」―大正十三年一月刊
「橋田東聲歌集」―昭和十年八月刊
「無限の道」―昭和八年三月刊
「短歌初学」―昭和六年十一月刊
「子規と節と左千夫」―昭和四年三月刊
「正岡子規全伝」―昭和二年十二月刊
（以上七冊昭和女子大学蔵）

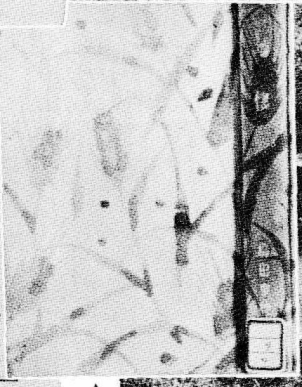
東聲肖像（才市惠氏蔵）

東聲自筆の履歴書（才市惠氏蔵）↓

高知県中村市有岡八四四番地にある生家

六つの墓

―自序に代へて―



↑生家の庭前に建つ東聲の旧居跡碑

↑歌集「地懐」―大正十年一月刊（昭和女子大学蔵）

下段右、有岡山真静寺にある墓

「地懐」の序文「六つの墓」―大正十年一月刊（昭和女子大学蔵）

目次

口絵
第三十二巻の成立……昭和女子大学近代文学研究室…（八）
凡例……昭和女子大学編集室…（一三）
武信由太郎……近代文学研究室…（一五）
田山花袋……近代文学研究室…（六三）
生田春月……近代文学研究室…（二六九）
橋田東聲……近代文学研究室…（三三一）
近代文芸年表(32)……近代文学研究室…（三九九）
巻末付記……近代文学研究双書編集室…（四四七）

第三十二巻の成立

本巻は昭和期第七として昭和五年四月から十二月までに没した左記四名の研究調査を収めた。

武信由太郎は文久三年（一八六三）七月二十三日、島根県気高郡青谷町に父良平母いよの長男として誕生。名古屋英語学校を経て明治十三年札幌農学校に入学。十七年卒業後長野県飯田中学校、三重県津中学校に奉職、二十年に一度入社して退いた横浜のジャパン・メイル社に二十七年再びもどり、中央での活躍を開始した。明治三十年頭本元貞、山田季治らと英字新聞、"The Japan Times"を創刊、日本の国際理解につとめんがため、健筆を競い彼はニース面を担当し、英語の才能を大いに発揮した。三十一年ジャパン・タイムス社より英語雑誌「青年」（のち「英語青年」）を創刊、和文英訳を担当、以後三十有余年間毎号多くの投稿を添削批評した。豊富な語彙を自由自在に駆使し、堪能巧妙、誠意をもって携わった。この他「英語世界」「英語界」を創刊して多くの読者を得た。三十七年鉄道省に奉職、翌年早稲田大学に教鞭をとり、英作文を担当、商学部の商業英語を築きあげた。そのかたわら三十八年「英文日本年鑑」を創刊、海外に日本を紹介すると共に多くの学徒の英語力を増進させた。大正七年「武信和英大辞典」を出版した。語数三十万、紙数二千五百頁に及び、従来の和英辞典における貧弱な語彙、不正確な英語を補ひ、訳語は正確巧妙、句法に変化を示し、従来の国語辞典になかっ

た新時代語の語句を七千余も集めて、充実した画期的なもので、多くの人々に用いられ、日本文化の海外紹介に大きな役割を果して、現出の研究社和英辞典の基となった。十三年には「武信ポケット和英新辞典」を出版。その他"Classical Takes of old Japan"の刊行、日本帝国美術史の英訳"History of Jepaneas Arts"昭和五年（一九三〇）四月二十六日、牛込若松町の自宅で没した。享年六十八歳。

花袋田山録彌は明治四年（一八七一）十二月十三日、父鉤十郎母てつの二男として、栃木県邑楽郡館林町に生まれた。明治十年館林東校に入学、途中丁稚奉公などを経て十九年同校高等科を卒業。この間吉田陋軒の休々塾で漢詩文を、兄実彌登の指導で和歌を学んだ。十四歳頃から「顕才新誌」に漢詩文や和歌を投書し始め、十五歳で処女漢詩集「城沼四時雑詠」を編む。又、桂園派歌人松浦辰男により和歌を学び、後年事実尊重の文学を生む要因ともなった。明治二十四年、二十一歳の時尾崎紅葉、江見水蔭の門をたたき、「千紫万紅」に処女作「瓜畑」を発表して彼の文学的活動がはじまった。水蔭創設の「小桜縅」に関係し同誌に「小詩人」を、そして「文芸倶楽部」に抒情的作品「わすれ水」を載せ、やがて「文学界」同人との交遊もはじめられた。三十年湖処子、独歩らと「抒情詩」を出版。このころ日本各地を旅行し、抒情性と自然愛に富んだ多くの紀行文を著わした。三十二年の「ふる郷」は浪漫的抒情的作品で習作期の集大成といえよう。三十二年太田玉茗の妹りさと結婚。三十四年の「野の花」翌年の「重右衛門の最期」には自然主義への思想的推移がみられる。三十七年評論「露骨なる描写」を「太陽」に掲げ、自然主義的排技論を主張して反響をよんだ。同年日露戦争に従軍、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

観戦記を綴って、抒情的浪漫性から客観的傍観的文学の方向を確立していった。三十九年「文章世界」の主筆となる。明治四十年、ハウプトマンの「寂しき人々」に示唆されて「蒲団」を発表、自然派作家第一人者としての名声を得たばかりでなく、日本自然主義文学を確立した記念碑ともなった。更にゴンクールの「平面描写」に導かれ、「生」、「妻」、「縁」の三部作を連載。四十二年「田舎教師」を発表、関東の暗い田舎町の風景に点綴されるささやかな人間の生活を浮き彫りにし、文壇における自然派の勢力を不動のものにした。博文館を退社後も作品を次々と発表。晩年は愛欲小説に集中すると共に、歴史小説「源義朝」、「道盛の妻」などを執筆。昭和五年（一九三〇）五月十三日五十九歳の生涯を閉じた。

春月生田清平は、明治二十五年（一八九二）三月十二日、鳥取県西伯郡米子町で酒造業を営む父生田左太郎の長男として生まれた。三十一年明道尋常小学校に入学、この頃より巌谷小波の作品に親しみ、「少年世界」を愛読して文学に興味をもち、三十五年角盤高等小学校に進んだ折、家業が破産、苦しい時代を過したが、文学への情熱は失われることなく諸雑誌に投稿した。明治四十一年、十六歳の時上京、同郷の先輩生田長江宅に身を寄せた。四十三年以降「帝国文学」、「東亜の光」に詩を寄稿、発表の舞台を広げた。四十五年独逸語専修学校にてドイツ語を学び後年のドイツ文学翻訳の基礎をきずいた。大正三年ツルゲーネフの「初恋」を、翌年ゴオリキーの「強き心」を翻訳出版。一方詩作にも専念、「新潮」に発表したが世評をよぶまでには至らず、又、家庭不和、生活困窮に加えて、自己の才能に対する自信を喪失、虚無的思想への関心を深め、大正五

年「虚無思想の研究」を執筆。このころ堺利彦、大杉栄らをしり、社会主義思想にも関心を深めた。大正六年、処女詩集「霊魂の秋」を出版。憂愁と苦痛に満ちた時代の作品で、愛の世界から虚無の世界へ、そしてここからの脱出の努力と流動する心のあとをみることができる。ついで翌七年の「感傷の春」により、詩人としての位地を固めた。十一年「慰めの国」、「澄める青空」を出版、十四年の「自然への恵み」に自然への親近をみて、一種の悟りを得た心境を詠出。昭和三年頃書いた長編詩「時代人の詩」には赤裸々な自己の心情を吐露し、時代の矛盾と社会の暗黒を慨歎しており当時の心情を知る貴重な作品である。遺稿詩集「象徴の烏賊」は春月の詩集の到達点を示している。なお大正八年の「春月小曲集」をはじめ幾つかの小曲集を刊行。大正十一年、長編小説「相寄る魂」を執筆、郷里米子の自然を繊細に描写し、恋愛の讃歌を綴った。又、訳詩中ハイネに情熱を注いで「ハイネ詩集」、「ハイネ全集」を出版、その他ドイツ浪漫派詩人の翻訳「私の花環」がある。昭和五年（一九三〇）五月十九日、瀬戸内海播磨灘で投身自殺をとげた。享年三十八歳。

東聲橋田丑吾は明治十九年（一八八六）十二月二十日、高知県幡多郡中筋村に農業を営む父忠太郎母七の二男として生まれた。明治三十四年県立第二中学校分校に入学、三十七年頃、雑誌「青年」にはじめて短歌を投書、大町桂月から激励の評を得て一等になる。三十九年鹿児島第七高等学校造士館に進む。このころツルゲーネフの作品や漱石、子規、樗牛のものを読み、「中央公論」、「文章世界」に小品文や短歌を寄せた。四十年には歌の同好会「樟の葉会」を作り、森園天涙、今村黙郎らと白楊会を起こし、回覧誌「墾新野」を出す。翌年四

月には「明星」の詠草欄に短歌を載せ、「中央公論」、「文章世界」に新体詩を投稿した。明治四十二年東京帝国大学英文科（のち経済学科に転ず）に入学、森田草平、伊藤左千夫をしり、「ホトトギス」、「アララギ」に小説を発表、歌作から遠ざかった。大正二年卒業後、川島朝子（北見志保子）と結婚。東京日日新聞社に入社、編集よりも翻訳に興味をもち、イプセンの「ロスメルスホルム」、クープリンの「決闘」を翻訳出版、ゲーテの「シャクンタラ姫」、「ファウスト」も手がけた。大正四年喀血、病臥中、斎藤茂吉の「赤光」をよみ、以後作歌に傾いた。茂吉、節、赤彦をはじめ歌人、歌壇を論じて「アララギ」、「詩歌」に発表。大正五年「評釈現代名歌選」を出版、翌六年「珊瑚礁」を創刊、歌作、歌論に精進した。すなわち静寂な世界を抒情的にうたい、歌論特に万葉論を掲載した。そして晶子、赤彦、牧水、茂吉、白秋ら多くの歌人の寄稿も受けた。しかし大正八年六月同誌分裂して終刊。同年八月臼井大翼と共に「覇王樹」を創刊。「兄」六十一首、「朝霧」二十八首などに心の苦悩を連作して表現、歌壇から注目を浴びた。そして自らの歌を「性格悲歌」と称し、そこに独自の芸術を見出した。十年処女歌集「地懐」出版、寂寥の中に喜悦と感動をうたった。やがて良寛に敬慕、悲哀のこもった良寛の芸術に渇仰した。十三年評論集「自然と韻律」を出版、万葉人の生活と精神を尊重、人間的詩歌を提唱した。かくして彼は万葉調歌人節、子規、左千夫らに私淑しながらも主情、悲哀をこめた独自の人間短歌を提唱し実践したのである。昭和五年（一九三〇）腸チフスで十二月二十日、四十五歳で没した。

（昭和女子大学近代文学研究室）

凡例

一、研究調査に着手してから本叢書刊行に至るまで、凡そ二十二年を要しているので、指導者中で岡田酉藏、福井久藏、池田龜鑑、金子健二の四先生はすでに鬼籍に入り、研究担当者中にも病でたおれたものが数名ある。本叢書をこれらの人々に見てもらったならばさぞおよろこび下さるであろう。謹んで霊前に献上する。

二、本叢書は卒業期に近い学徒の中から担当者を選び、調査研究の範囲、方法、次第などを相談して、先ず第一に業績の検討に着手した。不明、疑問、困難、迷路などにつき当りつつ一年ぐらいするうちに明瞭になるので、次の年から生涯と遺跡を究めてからいよいよ論文作成にとりかかった。このとき、材料の批判、整理、布置、論文の構成などについて相談しながら脱稿に至る。ついで修訂、校閲を経てから編集という順で、その間約二カ年が費される。

三、収録事項の研究に対し、直接間接に協力した学徒は延三千名に上るが、その協力と、歳月の恩恵に加うるに学界、文壇、教育界、操觚界など各界先輩の懇切な教示と、遺族及び関係者の好意を感謝する。

四、年表で著作というのは、発表が生前と死後とを問わずその作者の作品のすべてを指し、資料とは、第三者の考説、論評、感想等の文献を指すのである。従って死後刊行された全集物や編集物は著作年表に、第三者の解題や解説の如きは資料年表の中に収めた。又、単行本の中での編集物は、所要の小題を書題名欄に、書名

と発行所を誌紙名欄に、小題の執筆者を筆者欄に掲げることとする。

五、年表の末尾に追込んだ分は氏名のみが引用されている場合が多い。資料の価値は研究の分野、方向又は時代によって移動するものであるから、できるだけ取捨をさける方針にしたが、紙面の都合で割愛の止むなき場合がないともかぎらない。

六、各稿の末尾に「採訪」と「文献」を掲げたのは、研究調査の際に訪問して教示を仰ぎ、便宜を与えられた方々に感謝の意を表すると同時に資料の出所、起稿や修訂に当って参考した文献書目を記して、その依拠を明らかにした。ために研究資料の所在表示を旨とする「資料年表」と一部重複することがある。なお採訪した人の記名は年齢順、文献の記載も発表（推定）年次順にした。

七、引用文はすべて原文に従い、外国文の場合は訳文を添付するが、通読に便するため時に大意を用いることもある。なお原文中の誤りや疑わしい箇所は右側に（ママ）と記入し、又、異本を示す場合も同様（イ）と記入する。

八、外国の国名、地名、人名は片仮名を原則とし、倫敦、桑港のように慣用久しいものでも、逐次片仮名に改めるつもりである。但し、すでに日本語化しているものはこの限りでない。

九、邦人氏名は旧漢字を用い見出しに振りがなをつけ、外人名の初出は原語を付し以下片仮名を用いる。

一〇、年代に日本年号と西暦とを適宜織りまぜて、どちらかでも検索できるようにした。年齢は満年齢を採用したが、場合によっては数え年何歳としるすこともある。

（昭和女子大学編集室）

武信由太郎

文久三年（一八六三）七月二十三日生
昭和五年（一九三〇）四月二十六日歿

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com